

群馬県小野上村八木沢清水遺跡の押型文土器

石坂 茂

1 はじめに

小野上村八木沢清水遺跡は、養魚池の築造工事が行われた際に、縄文時代草創期後半の稲荷台式土器を伴った竪穴住居跡1棟が検出されたことを契機として、1977年8月から9月にかけて小野上村教育委員会による発掘調査が行われた。この発掘調査は前述の竪穴住居1棟の全掘を主眼に、その周辺の約200㎡の範囲を調査する小規模なものであり、当該の竪穴住居のほかにも縄文時代の土壌3基と時期不明の土壌1基、6世紀中葉以降の掘立柱建物の柱穴40個あまりの遺構が検出された。また、調査区内には良好な遺物包含層が堆積し、縄文時代草創期後半から前期後葉にかけての多量の土器や石器をはじめ、弥生時代中期および古墳時代後期から平安時代にかけての少量の土器が、ほぼ層位的に出土した。特に縄文時代早期では押型文土器や沈線文土器、条痕文土器などの2,000点余りにおよぶ多量の破片が出土し、その内容には見るべきものがあった。これらの調査成果のうち、遺構やそれに伴う遺物については既に概報や群馬県史（原始古代⁽¹⁾）に公表してあるが、包含層からの出土遺物についてはその一部を報告するに止どまっている。

一方、最近における縄文時代の草創期後半から早期にかけての土器研究は、関東地方を除いた地域における土器型式の編年の空白や、山内清男の時期区分に対する見直しとも絡んで、極めて活性化してきている。その中でも凡日本的に分布し、研究史的にかなり長い歴史をもちながら未だ編年の確立していない押型文土器をめぐる、多くの研究者によって活発な論考が相次いでいる。こうした状況を鑑みたときに、八木沢清水遺跡の調査に携わったものとして、至急に当遺跡の本報告の刊行をもって少しでもこれに寄与すべき責務を有すると感じるが、それも諸般の事情があって簡単には果たし得ない。そこで、本稿においてとりあえず包含層から出土した早期の土器群の中で過半数を占める押型文土器について資料の追加公表をし、その責任の一端を果たすとともに、本報告については後日を期したいと思う。



図1 遺跡の位置

2 遺跡の概要

本遺跡は県中西部に位置する子持山(標高1296m)西南麓の小野上村東部に所在する。遺跡の立地する地点は標高460mで、西側には子持山の標高600m付近より流出する小河川の八木沢川が南流して小規模な開析谷を形成している。また、東側にも小さな開析谷があり、遺跡はこの両支谷に挟まれた幅の狭い馬の背状丘陵部の緩斜面に占地している。遺跡地内は南東方向へ向かって緩やかに傾斜しているために土層の堆積は地点によって異なるが、包含層からの出土遺物の多い竪穴住居の検出地点では、地表から上部ロームまでの間に2mにおよぶ土層が堆積し、図2のように7層に分層される。このうち縄文時代の遺物が包含されているのはIV～Vb層で、IV層は前期の花積下層式～諸磯b式期、Va層は早期の押型文土器と三戸式～茅山上層式期、Vb層は草創期後半の稲荷台式期の遺物をそれぞれ主体に包含している。しかし、これらの遺物は明確に層位的な出土状況を示す訳ではなく、本稿で扱う押型文土器についてもVa層を中心にしてその上下層からも多量に出土している。いわば各期の遺物が混在した状況にあり、その層位的関係から押型文土器の変遷や他型式との平行関係を把握することは困難であった。

またVI層のローム上面にて、長径5.0×短径4.5mの不整円形を呈した竪穴住居1棟を検出したが、床面に密着した土器はなく、埋没土中より稲荷台式の撚糸文土器と押型文土器の破片が少量出土したのみである。

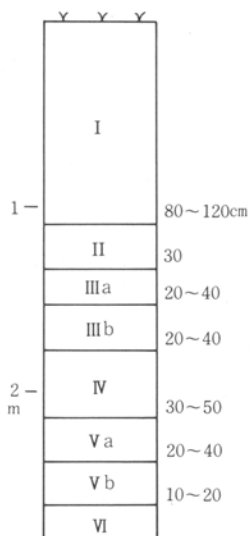


図2 基本土層

3 押型文土器の分類

八木沢清水遺跡から出土している押型文土器は、小破片のものがほとんどであるが、その総点数は1144点である。無論この総点数は、同一個体を弁別することができずにそれらを含んだ数値であり、実際の総個体数を意味するものではない。これらの押型文土器の主体をなしているのは山形文土器で、総数1041点(91%)である。その他に格子目文土器が50点(4%)、楕円文土器51点(4%)、特殊な押型文土器6点、2種類の原体を使用する押型文土器2点が出土している。また押型文土器ではないが、類似した文様構成をもつ縄文施文の土器が17点存在する。これらの押型文土器や縄文施文の土器について、文様構成を中心にして分類し、その特徴を記述してみたい。

Ⅰ 群 山形文土器である。口縁部と胴部の施文方向が異なった、直交施文の文様構成をとるものが目立つが、口唇部における施文のあり方を加味して分類すると次のようになる。

1類(1~13) 口縁部は横位に、それ以下の胴部を縦位に帯状施文する、いわゆる直交帯状施文の文様構成をもつものである。口縁部の横位施文は1帯のみで、口唇部上面や口唇内側の内角部に施文する例が目立つ。総数は14点検出され、a~fに6細分される。

a(1・3・5)：口唇部の施文が上面のみで、内角部には施文されないもの。4点が存在する。

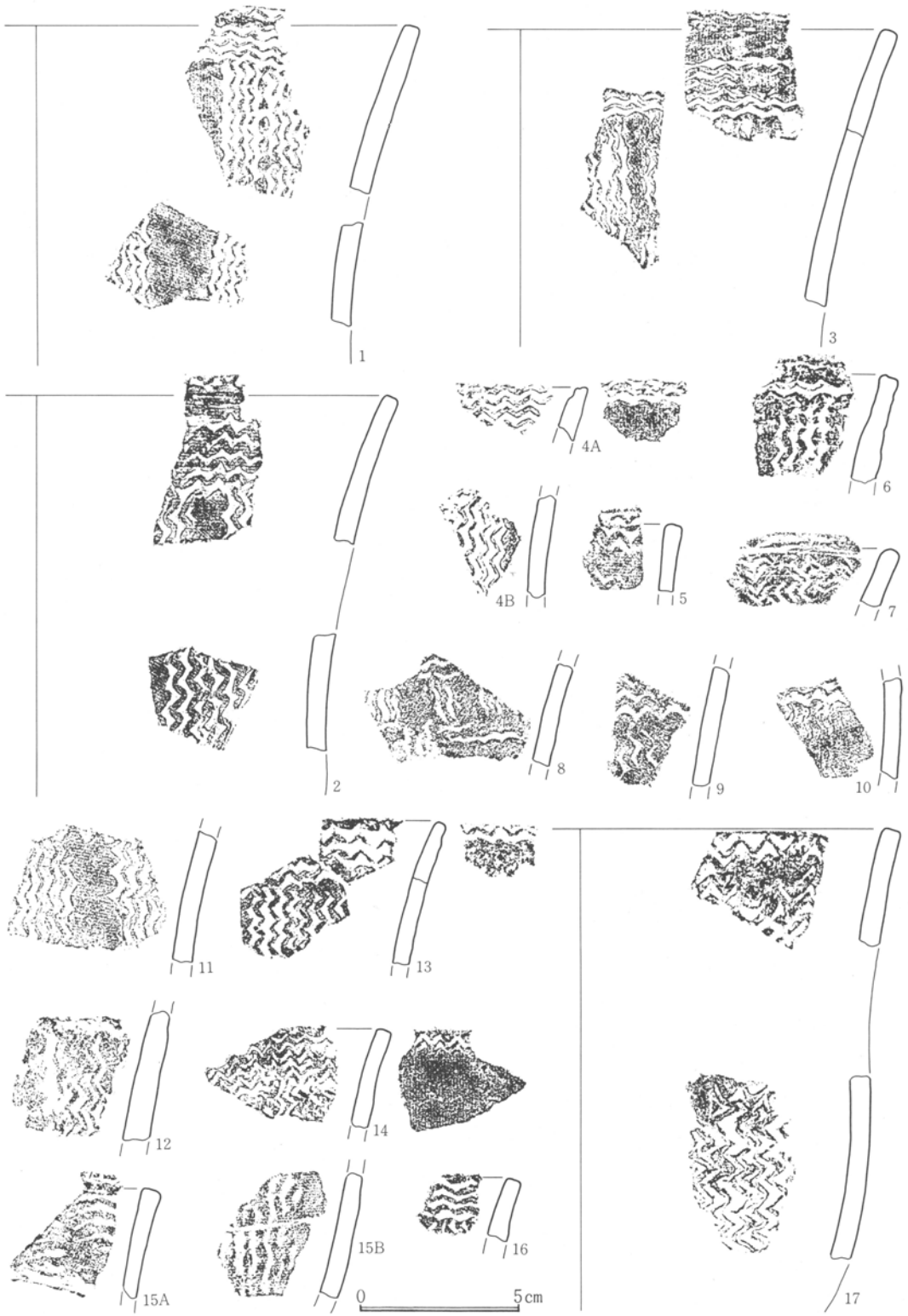


図3 山形文土器 (I-1~2類)

b (4) : 口唇部の施文が上面および内角部の両部分になされるもの。1点が存在する。

c (2) : 口唇部の施文が内角部のみに行われるもの。1点が存在する。

d (6・7) : 胴部の縦位帯状施文が口縁部の横帯を突き抜けるもので、口唇部上面にも施文する。2点が存在する。

e (9~12) : a~f のいずれかの胴部破片である。

f (8) : d と同様に、縦帯が横帯を突き抜けて施文される土器の胴部破片である。d の横帯は1帯のみであるが、本類は少なくとも2帯以上で構成されている。1点が存在する。

2類 (13~21) 口縁部が横位、胴部が縦位の直交施文となる点で1類と類似するが、胴部は無文部を置かずに密接施文され、口縁部の横帯は1ないし2帯である。総数は22点検出されている。

a (15) : 口唇部の施文が口唇部上面のみで、口縁部の横帯は1段に施文する。1点が存在。

b (18) : 口唇部の施文が内角部のみのもので、口縁部の横帯は10mmの無文部を挟んで2段に施文されている。1点が存在する。

c (13・14・19) : 口唇部の施文はb類と同様であるが、口縁部の横帯が1段のもの。3点存在。

d (16・17) : 口唇部の上面や内側にまったく施文しないもの。2点が存在する。

e (20・21) : a~d のいずれかの胴部破片であり、21の口縁部の横帯はb類と同様に2段に構成される可能性が高い。

3類 (22~25) 1類か2類のいずれかに分類されるが、小破片であるために文様構成を判別できないもの。22・23は口唇部上面に、24は口唇部の内角部に施文され、25は口縁部の横帯が2段に施文される。22・23は1a類か2a類であろう。総数では7点検出されている。

4類 (26~32) 口縁部から胴部にかけて、縦位に施文されるものである。小破片のために判然としないものもあるが、そのほとんどが縦位密接の文様構成をとると思われる。口唇部の施文は上面と内面に認められる。内面の施文は口唇に接して原体幅の1帯を横位に施文するもので、1・2類で見られたような内角部に施文するものはない。総数は12点で、a~d に4細分される。

a (26~29) : 口唇部の上面にのみ施文されるもの。4点が存在する。

b (30) : 口唇部の上面と内面に施文されるもの。5点が存在する。

c (31) : 口唇部の内面にのみ施文されるもの。1点が存在する。

d (32) : 口唇部に全く施文されないもの。2点が存在する。

5類 (33) 口縁部から胴部にかけて、横位に密接施文されるものである。口唇部の上面や内側には、全く施文していない。総破片数では2点検出されている。

6類 (34~64) 小破片であるために全体の文様構成は不明であるが、横位の施文をもつ口縁部破片を一括した。口唇部の上面や内側に施文するものが多い。これらの破片は、1・2・5類か、あるいは口縁部から胴部にかけて横位帯状に施文する9類のいずれかに該当することは確実であろう。総数は64点で、a~e に5細分される。

a (34~40) : 口唇部の上面にのみ施文するもの。17点が存在する。

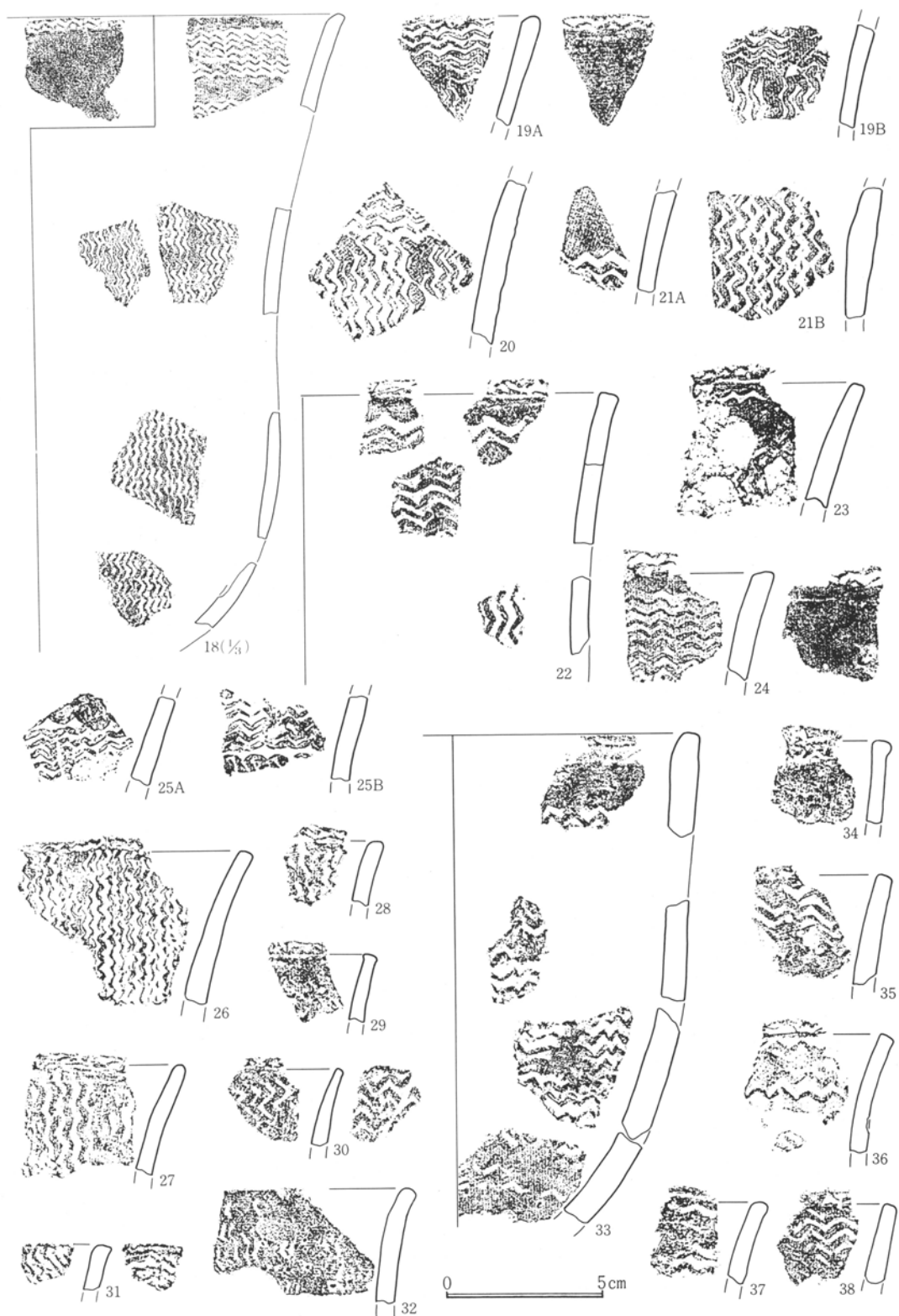


図4 山形文土器 (I - 2 ~ 6類)

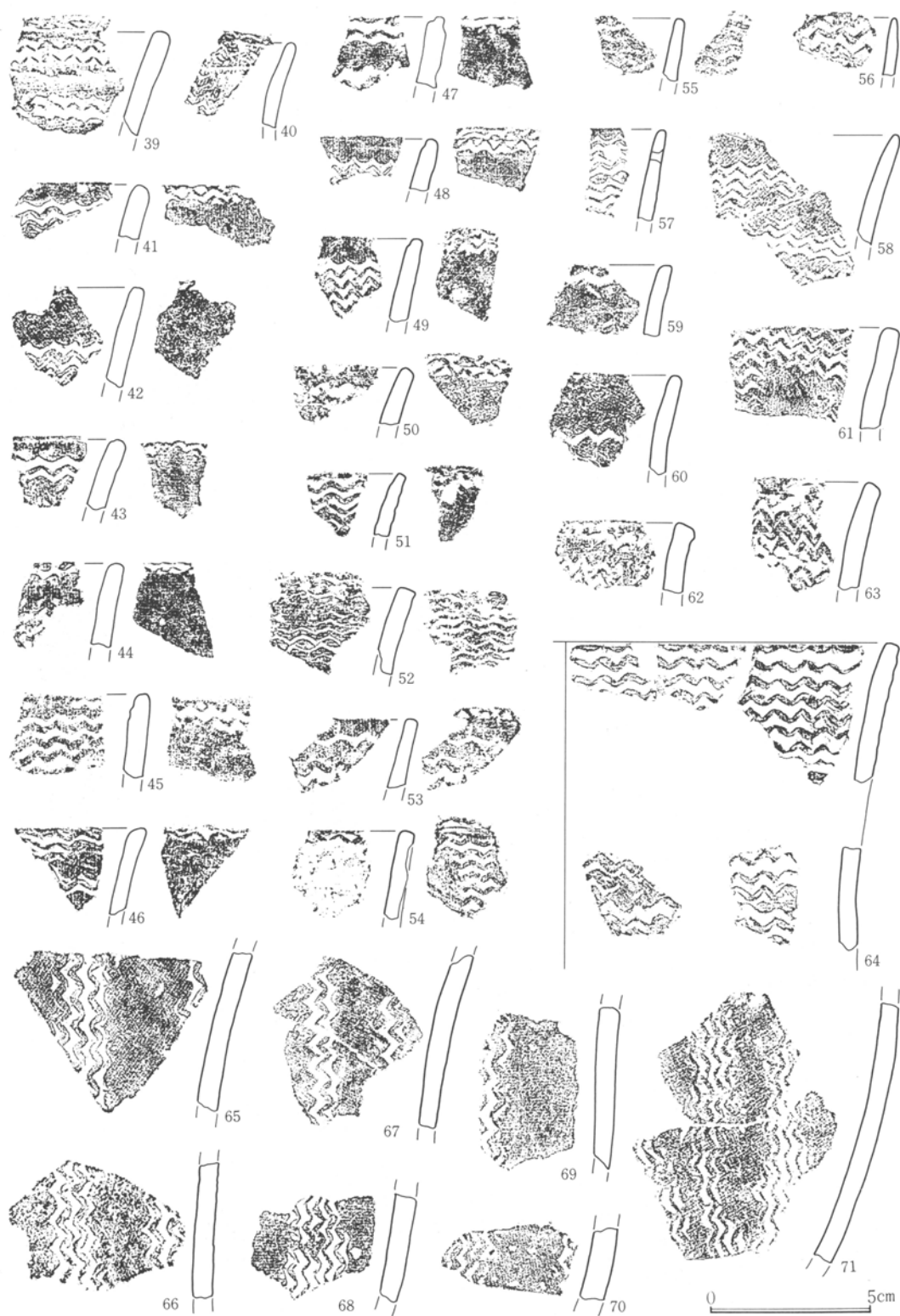


図5 山形文土器 (I - 6 ~ 7 類)

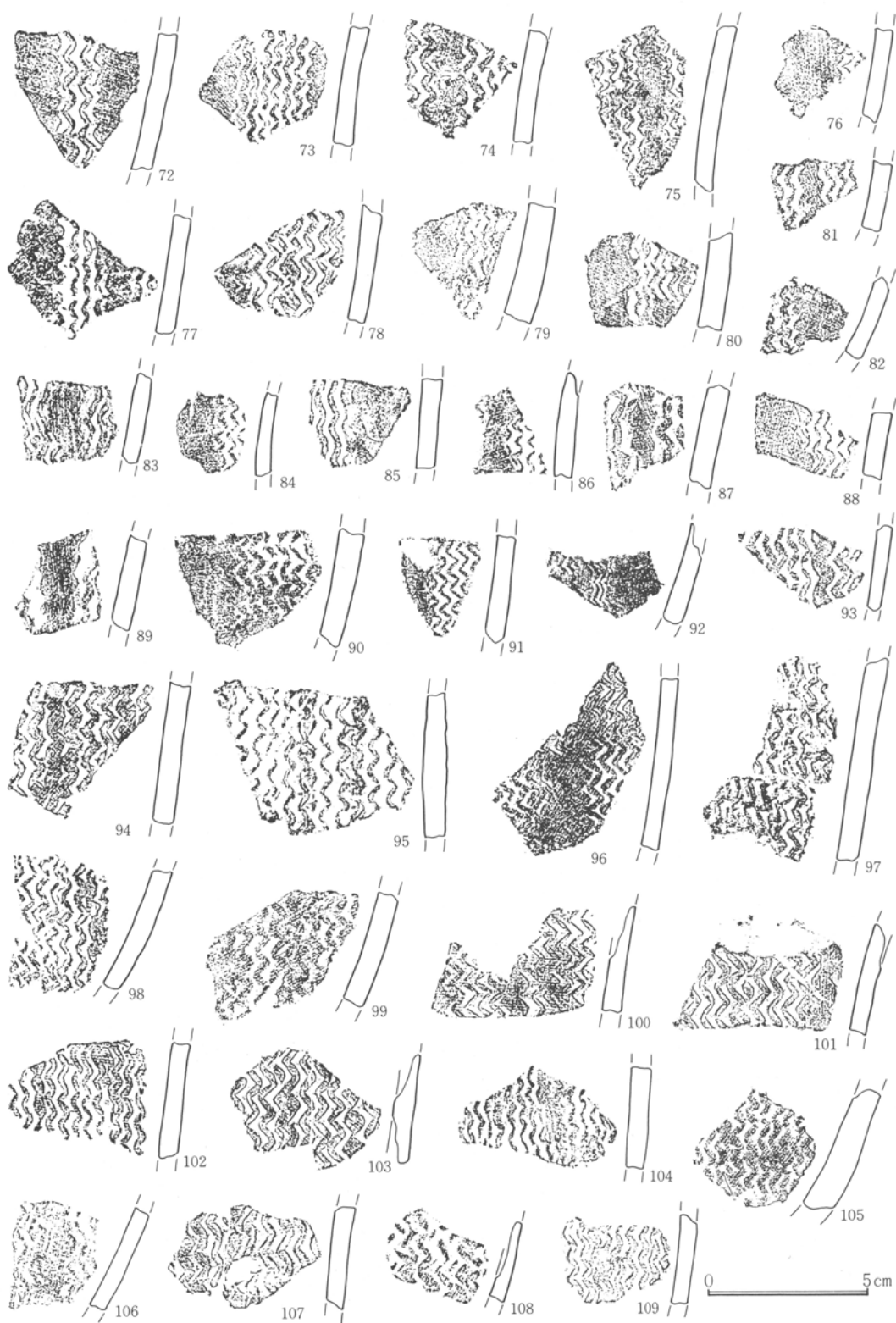


図6 山形文土器 (I - 7類)

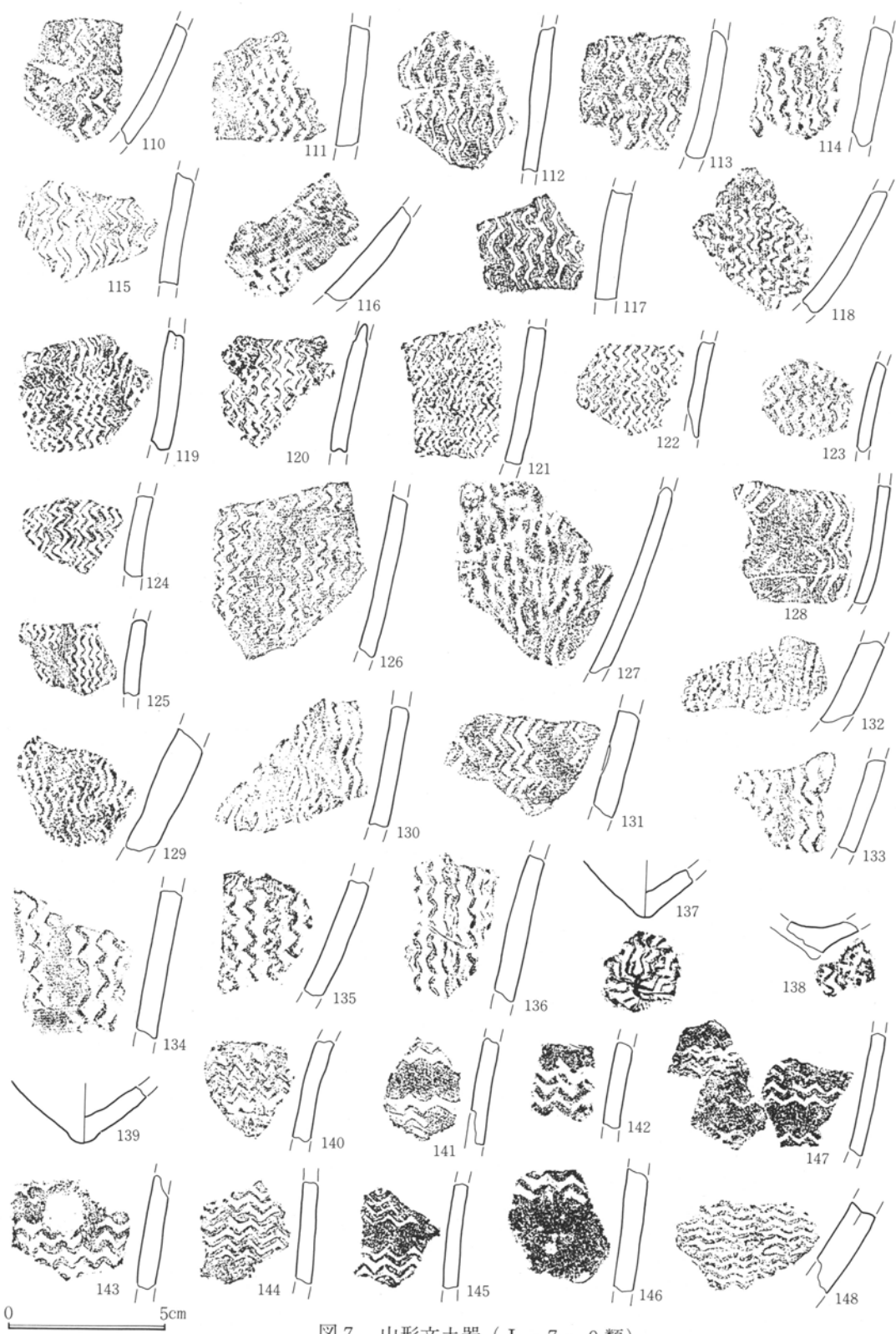


图7 山形文土器 (I-7~9類)

b (41～47) : 口唇部の内角部にのみ施文するものである。41～43の口縁部は口唇下にわずかな無文部を残して横位に施文しており、42の無文部は17mmの幅をもつ。19点が存在する。

c (48～51) : 口唇部の上面と内角部とに施文するもので、48・49の口縁部は口唇下にわずかな無文部を置いて横位施文している。6点が存在する。

d (52～54) : 口唇部上面と口縁部内面とに施文するものである。7点が存在する。

e (55) : 口縁部の内面にのみ施文されるもの。4点が存在する。

f (56～64) : 口唇部および内面に全く施文しないもの。57・58は挟在する無文部の幅が狭いが、少なくとも2帯の横位施文であろう。64は2段以上の密接施文と思われる。11点が存在。

7類 (65～136) 縦位施文される胴部破片を一括した。帯状施文と密接施文の差異により、a・bに2細分される。

a (65～92) : 縦位に帯状施文されるもので、1類の胴部に該当するものであろう。総破片数では228点検出されている。

b (93～136) : 縦位密接の文様構成をもつもので、2類の胴部に該当するものであろう。このほかに帯状か密接施文か判定できないものを含めると、総破片数では602点検出されている。

8類 (137～139) 底部破片を一括した。138は底部の先端を欠損するが、いずれも乳房状の尖底となろう。137・138は縦位施文であり、1～4類いずれかの底部に該当しよう。139は施文が見られず、帯状施文の無文部に相当するものと思われる。総破片数では4点検出されている。

9類 (140～150) 横位の文様構成をとる胴部破片を一括した。140～147は胴部上半の破片で1・2類に該当すると思われるが、147・148は胴部下半の破片であることから、口縁部から胴部にかけて横位帯状や横位密接の文様構成となる可能性もある。総破片数では86点検出されている。

II 群 格子目文土器である。圧倒的多数を占める山形文土器に比べて、全体比率が4%にしかならない総数48点の破片を個体別に分類すると36個体が確認できる。文様構成の判明する資料が少ないが、以下のように分類される。

1類 (149) 口縁部に1帯の横位施文を行い、以下胴部にかけて縦位帯状に直行施文するものである。胴部の縦帯は2帯を密接させて施文し、1単位の縦帯を構成している。口唇の内角部に施文し、山形文土器の1c類とほぼ同様の文様構成である。このほかに1個体が存在する。

2類 (150) 口縁部から胴部にかけて横位帯状に施文されるものである。無文部の幅は2～8mmと一定せず、部分的に摩り消した痕跡も認められる。これ1点が検出されたのみである。

3類 (151～154) 小破片のために全体の文様構成は不明であるが、横位施文をもつ口縁部破片を一括した。これら4個体が出土したのみであるが、口唇部の施文や帯状施文の有無によって、a～dに4細分される。

a (151) : 口縁部は8mmの無文部を挟んで2帯に横位帯状施文され、口唇上にも施文されている。文様のややくずれた格子目文である。

b (154) : 帯状施文の有無は不明であるが、内側にも横位に施文している。

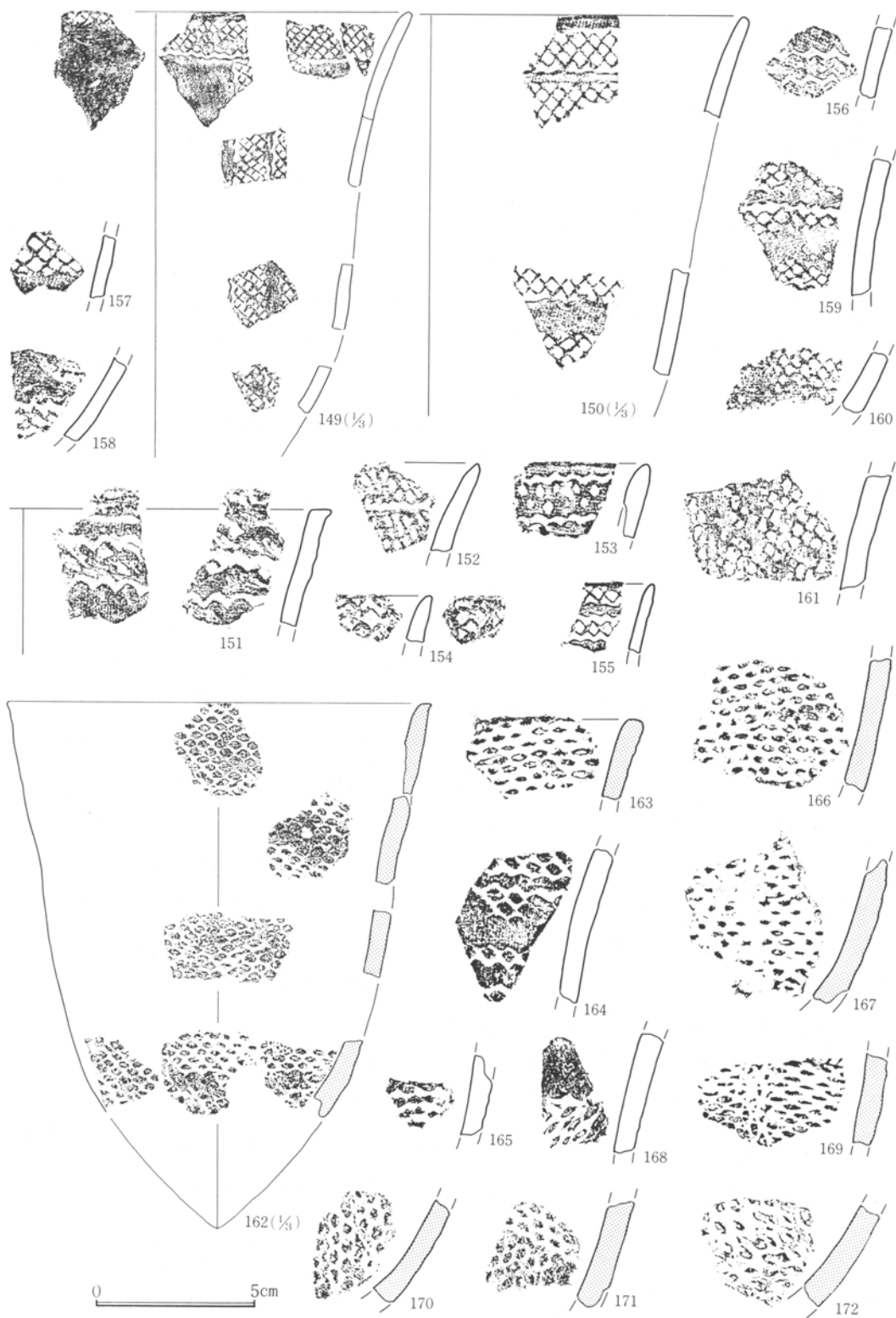


図8 格子目文土器（Ⅱ-1～5類）と楕円文土器（Ⅲ-1～3類）

c (153)：口縁部は横位に帯状施文されるが、口唇上や内側に施文されないものである。

d (152)：口縁部に密接した横位施文が少なくとも2段に行われているもので、口唇上や内面には施文されていない。

4類 (155・156) いわゆる菱目文と呼ばれるものであり、全体の文様構成は不明であるが、ともに横位に帯状施文されている。155の口縁部破片は、幅の狭い無文部を挟んで2帯の横位帯状施文がみられ、口唇上や内面には施文されていない。この2点のみが存在する。

5類 (157～161) 全体の文様構成は不明であるが、横位施文をもつ胴部破片を一括した。帯状施文および密接施文の違いにより2細分される。

a (157～159)：無文部を挟んで帯状施文されるもので、2類の胴部破片の可能性が高い。総数で7点が存在する。

b (160・161)：密接施文されるものである。この2点が確認されているのみである。

III 群 楕円文土器である。格子目文土器とほぼ同数に近い51点の楕円文土器は、個体別に分類すると25点となる。文様構成を判別できるものは少ないが、比較的に横位密接施文のものが多く、施文方向を中心に分類すると次のようになる。

1類 (162) 口縁部から胴部にかけて横位に密接施文されるもので、口唇上や内面には施文されない。文様構成の明確なものはこの1個体のみである。

2類 (163) 全体の文様構成は不明であるが、横位施文の口縁部破片である。1類と同様に口唇上や内側には施文しない。この1点が出土したのみである。

3類 (164～172) 全体の文様構成の判別できない胴部破片を一括した。帯状施文の有無や施文方向の差異により、a～eに5細分される。

a (164・165)：無文部を挟んで横位に帯状施文されるもの。164の無文部の幅は5mmと狭い。165は各楕円が横に連珠状につながっている。5個体の破片が出土している。

b (166・167)：横位に密接施文されるもので、8個体が出土している。

c (170)：縦位に密接施文されるもので、2個体が出土している。

d (160・170)：横位施文をした後に縦位あるいは斜位に重複施文をするものである。169は斜位に、170は原体幅の一部を縦位に施文している。この2個体のみが出土している。

e (171・172)：不規則に施文されるもので、2個体が出土している。

IV 群 I～III群に分類されない2種類の原体を併用するものや、特殊な原体を使用している押型文土器を一括した。出土した個体数は、ここに掲載したものがすべてである。

1類 (173・174) 2種類の原体を併用して、横位に密接施文するものである。173は楕円文を施文後に直線状文を、174は山形文を施文後に楕円文をそれぞれ施文している。

2類 (175) 山形文土器であるが、山形の頂・底部が途切れてハ字状となるものである。

3類 (176) 格子目文と弧線状文が交互に刻まれた原体により縦位密接に施文されるもの。

4類 (177) 2群の格子目文の中に点状の彫刻を施したもので、横位に施文されている。

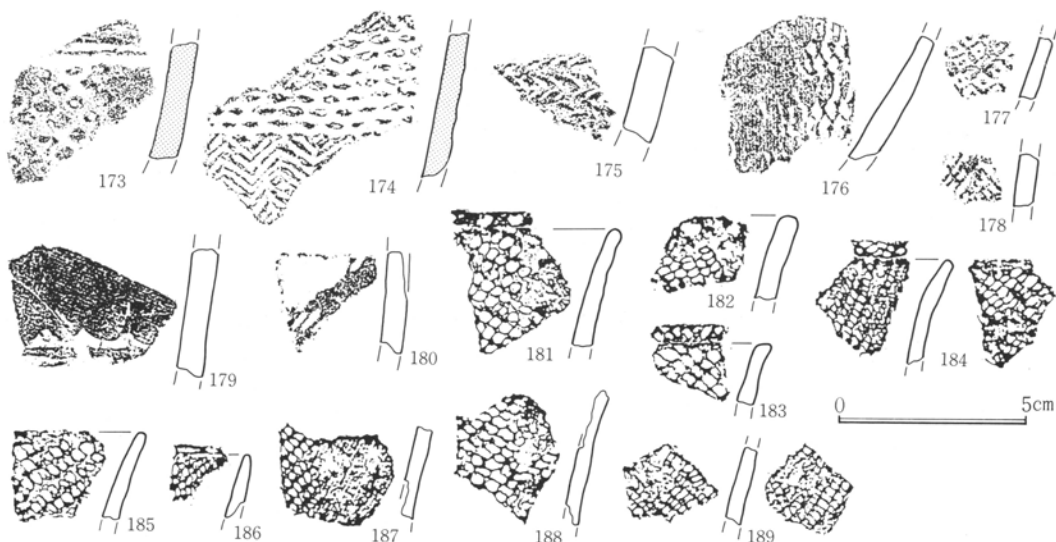


図9 その他の押型文土器（Ⅳ-1～7類）と縄文施文土器（Ⅴ-1～3類）

5類（178） 長方形の変形格子目文が矢羽根状に刻まれた原体を縦位に施文するものである。

6類（179） 1類で併用された直線状の押型文が、横位に带状施文されるものである。

7類（180） 小破片のために不明瞭ではあるが、長楕円状のいわゆるネガティブな押型文が幅10mmの無文部を挟んで横位に带状施文されるものと思われる。2帯の施文が確認できる。

Ⅴ群 押型文土器と同様の文様構成をもつ縄文施文の土器を一括した。文様構成の判別できないものが多いが、明確に縦位の带状構成をもつものもある。総破片数では17点、個体別で16点検出されている。縄文の施文部位や方向の差異により、次のように分類される。

1類（181・182） 口縁部より縦位に带状施文される口縁部破片である。口唇部上面の施文の有無により2細分されるが、この2点が出土したのみである。

a（181）：口唇部に縄文原体の先端部による刺突文を施すものである。

b（182）：口唇部上面に施文しないもの。

2類（183～186） 文様構成の不明な口縁部破片を一括した。この4点が出土したのみである。施文の方向や部位の差異により、a～dに4細分される。

a（183）：口縁部は縦位施文で、口唇部上面にも施文されるもの。

b（184）：口縁部および口唇部の施文はa類と同様であるが、内面に2段以上の横位施文がなされるものである。

c（185）：口縁部の施文はa類と同様であるが、口唇部上面に施文しないもの。

d（186）：口縁部は横位施文で、口唇部上面に施文しないもの。

3類（187～189） 全体の文様構成は不明であるが、縦位に施文される胴部破片を一括した。施文の差異により、a・bに細分される。

a（187）：縦位に带状施文されるものである。2個体が出土している。

b (188・189) 帯状か密接施文か不明である。189は内面にも横位に施文されている。8個体の破片が出土している。

4 各属性の分析

前項で分類した押型文土器と、それに類似した文様構成をもつ縄文施文の土器について、各類別単位での器形・胎土・器厚や施文原体の種類・原体の長さおよび直径などの諸属性と、それら相互の相関性を分析してみたい。ただ、なにぶんにも対象とする資料が小破片であり、各属性の総てを備えているものが少数なため、おおまかな傾向把握に止どまるものが多い。

(1) 器形 (図10)

山形文土器 各類を通じて全体の器形の判明しているものはないが、およそ図10のA・Bの2形態が想定される。直交施文や縦位施文の1～4類は口縁部がかなり外反気味に開き、胴部下半で湾曲しながら底部へ移行するものが目立つ。底部の形状は、8類が本類の底部に該当することから、乳房状の尖底部と考えられ、A形態を当てることができよう。こ

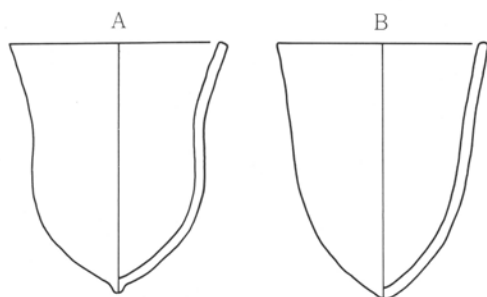


図10 各押型文土器の形態

れに対して、横位施文の5類は口縁部が直立して胴部下半の湾曲も少なく、B形態のような砲弾形に近い形状が想定される。口唇部の形態は、基本的に当該部位への施文の有無によって規制され、口唇部上面に施文されることの多い1～4類は当然のことながら角頭状を呈するものが多い。しかし、1～3類では無施文のものでもその多くが角頭状に成形されており、施文の有無にかかわらず角頭状を基本形態とするものであろう。また口唇部の内角部に施文される1～3類は、4や18のように内角部がつぶれて内削ぎ状となる点で特徴的である。5類は口唇部上面に施文されず、丸棒状の形態を呈している。各類とも内面の整形は丁寧で、研磨されているものが多い。

格子目文土器 山形文土器と同様に器形の判明しているものはないが、図上での復元可能な直交帯状施文の1類や横位帯状施文の2類などは、山形文土器の1～4類と同様に口縁部が外反気味に開口し、胴部下半にて湾曲するA形態と推定される。また横位に帯状施文された4類の菱目文土器の口唇部形態は、2類とも類似した尖頭状を呈するもので、外反気味に開く器形を考慮すると、それと同様のA形態が想定される。口唇部の形態は、その上面に施文される例が少ないこともあり、丸棒状や尖頭状となるものが多い。底部は未検出で、その形状は不明である。内面の整形は山形文土器と同様に丁寧で、2類の150は研磨されて光沢を帯びている。

精円文土器 図上での復元によって、ある程度器形の判明しているのは、横位に密接施文される1類のみである。1類は口縁部の外反や胴部の湾曲が弱く、B形態と同様の砲弾形に近い形状をもつと思われる。口唇部はやや内削ぎ状に成形されている。他類については検出例が少なく不明な点が多いが、横位に帯状施文される3a類はかなりの屈曲が認められることから、A形態と類

似した器形をもつようである。内面の整形は、山形文土器に比べて粗雑なものが多い。

その他の押型文土器 いずれも小破片のみであり、器形の判明するものはない。6類の平行線状文土器の内面は、ほかに例を見ないほど良好に研磨されて光沢を帯びる。

縄文施文の土器 全体の器形は不明であるが、口縁部は山形文土器1～4類と同様かなり外反している。口唇部の形態は、上面に無施文のものは丸棒状を呈する。内面の整形は押型文土器に比べて粗雑であり、そのほとんどに指頭状の圧痕を残している。

(2) 胎土・焼成・色調

山形文土器 肉眼的に観察し得る胎土に含まれている夾雑物には、石英、長石、輝石、凝灰岩、結晶片岩の礫や砂粒が認められるが、結晶片岩を含むものは総片数65点と少ない。また繊維を含むものは皆無である。これらの夾雑物は、量的にわずかな差こそあるものの各類に共通して含まれているもので、各単位での特定の嗜好性は認められない。ただ、5類の34は粒度の粗い安山岩礫を含む点で、1・2類とは異なっている。2類の30や7類の83・84・93・128は、胎土に結晶片岩礫を含む。各類ともに焼成は堅緻で、色調は赤褐色を呈するものが多い。

格子目文土器 各類ともに胎土・焼成・色調を含めて山形文土器に類似するものが大半を占めるが、結晶片岩を含むものは皆無であり、また横位施文の2～5類の中で器肉の薄い152・154～156などは凝灰岩を除いた他の夾雑物をほとんど含まず、黄灰色の色調を呈している点で異なっている。例外的な存在ではあるが、横位施文の4類の中で繊維を含むものが1点認められる。

楕円文土器 格子目文土器と同様に山形文土器に類似するものが多数を占めるが、胎土に繊維を含むものが半数の12個体に認められる点で異なる。繊維を含むものは1・2・3b～3e類の162・163・166・167・169～172などのような、密接あるいは不規則施文のものに限定されている。

その他の押型文土器 2種類の原体を横位密接に施文する1類の173・174は胎土に繊維を含み、楕円文土器に類似しているが、色調が黄灰色を呈する点で異なる。横位帯状の文様構成をもつと思われる6類のネガティブ文土器は、同様の文様構成をもつ格子目文土器の2～4類に、また2類の変形山形文土器や4・5類は、山形文土器の1～4類に各々類似している。

縄文施文の土器 山形文土器や格子目文土器に類似するものと、胎土に雲母を含むそれらとは異質なものの3つに分かれる。雲母を含むものは188・189を含めて4個体で、いずれも焼成は堅緻で赤褐色を呈する。山形文土器に類似するものは182～185・187を含めて9個体で、他は格子目文土器2～4類の薄手に類似するが、色調が黒褐色のものが多い。各類別との相関性は不明。

(3) 器 厚

山形文土器 1類や7a類を含めた直交帯状施文のものは、最低3mm、最高8mmで6mmのものが最も多く、5mmがこれについて多い。比率的には4

第1表 山形文土器の各類別の器厚 (単位: mm)

| 類別 \ 厚さ | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|---------|----|----|-----|-----|----|----|---|----|
| 1 | | | 3 | 16 | | | | |
| 7 a | 2 | 19 | 65 | 86 | 41 | 10 | | |
| 2 | | 2 | 1 | 9 | 5 | | | |
| 3 | | | 2 | 3 | 2 | | | |
| 4 | 1 | 2 | 3 | 3 | 1 | 1 | | |
| 5 | | | | | | | 3 | |
| 6 | | 9 | 39 | 11 | 5 | 5 | | |
| 7 b | 20 | 56 | 192 | 194 | 81 | 14 | 2 | 2 |
| 9 | | 5 | 39 | 30 | 8 | 3 | | |

～7mmのものが全体の95%を占め、平均値は5.8mmである。資料数は少ないが、2類の直交密接施文や4類の縦位密接施文のものも同様の傾向を示す。また山形文土器全体でも9mmを上限として6mmが最多で、次いで多い5mmを含めると全体の70%を占める。平均は5.6mmである。

格子目文土器 資料数が少ないために各類別の傾向は把握できないが、個体別の35点を総体的にみると、最低4mm、最高9mmが各1点で、5mmが18点と最も多く、6mmが9点と次いで多い。平均値は5.6mmで、山形文土器に類似した傾向を示す。

楕円文土器 個体別の24点を総体的にみると、最低4mm、最高9mm各2点で、5～6mmが各6点と最多となるが、比率的には5～8mmがほぼ横一線に並び、平均値も6.3mmと山形文土器や格子目文土器よりもやや厚くなる傾向をもつ。

その他の押型文土器 5類が9mmと厚くなる他は、いずれも5～6mmである。

縄文施文の土器 総てが4～6mmの範囲に収まるが、4mmが5点、5mmが11点、6mmが1点とほぼ4～5mmに集中し、全体的に押型文土器よりも薄手である。

(4) 施文原体の種類

山形文土器 陽文部の幅広いものが大半を占めている。山形の波高と波長との比率により、およそA～Cの3種に分類されるが、各類別ごとの明瞭な傾向は存在しないようである。

A：波長5に対し、波高が1.5～2.5のもの。量的に最も多く認められるものであり、全体の94%に当たる976点がこの原体を使用している。B種とともに一周2単位に刻まれている。

B：波長5に対し、波高が3以上のもの。全体の3%に当たる31点がこの原体を使用する。

C：波長5に対し、波高が1以下のもの。B類とほぼ同数の3%に当たる36点がある。A・B種に比べて大柄で、少数ながら1周1単位に刻まれるものも存在する。

格子目文土器 151のように彫刻の粗雑な原体もみられるが、34個体中、32個体のものが整然とした格子目状あるいは菱目状の原体を使用しており、原体のパラエティーはほとんど認められない。1周2単位と3単位に刻むものが、ほぼ半数ずつである。

楕円文土器 楕円の長・短軸長の比率やその他の特徴により、およそA～Cの3つに分類されるが、各類別との明確な関係は把握できない。

A：長軸長2に対し、短軸長が0.5～1.5未満のもの。米粒状の形が一般的で、そのほとんどが長軸長5mm以下である。量的には本類が最も多く、25点中の19点が同種の原体を使用している。

B種とともに1周3単位に刻まれるものが80%以上で、2単位のは少ない。

B：長軸長2に対し、短軸長が1.6以上のもの。楕円形というよりも隅丸方形に近いような形状をしており、長軸長は5mm以上で、A種に比べて大柄である。5点に使用されているが、その内の3点は繊維を含んでおり、含繊維のものに多いようである。

C：長軸長2に対し、短軸長が0.4以下のもの。細長い楕円形で、3D類の2点のみに認められる点で、特徴的である。

D：楕円の長軸方向で相互に連結したいわゆる連珠文と呼ばれるもので、1点のみである。

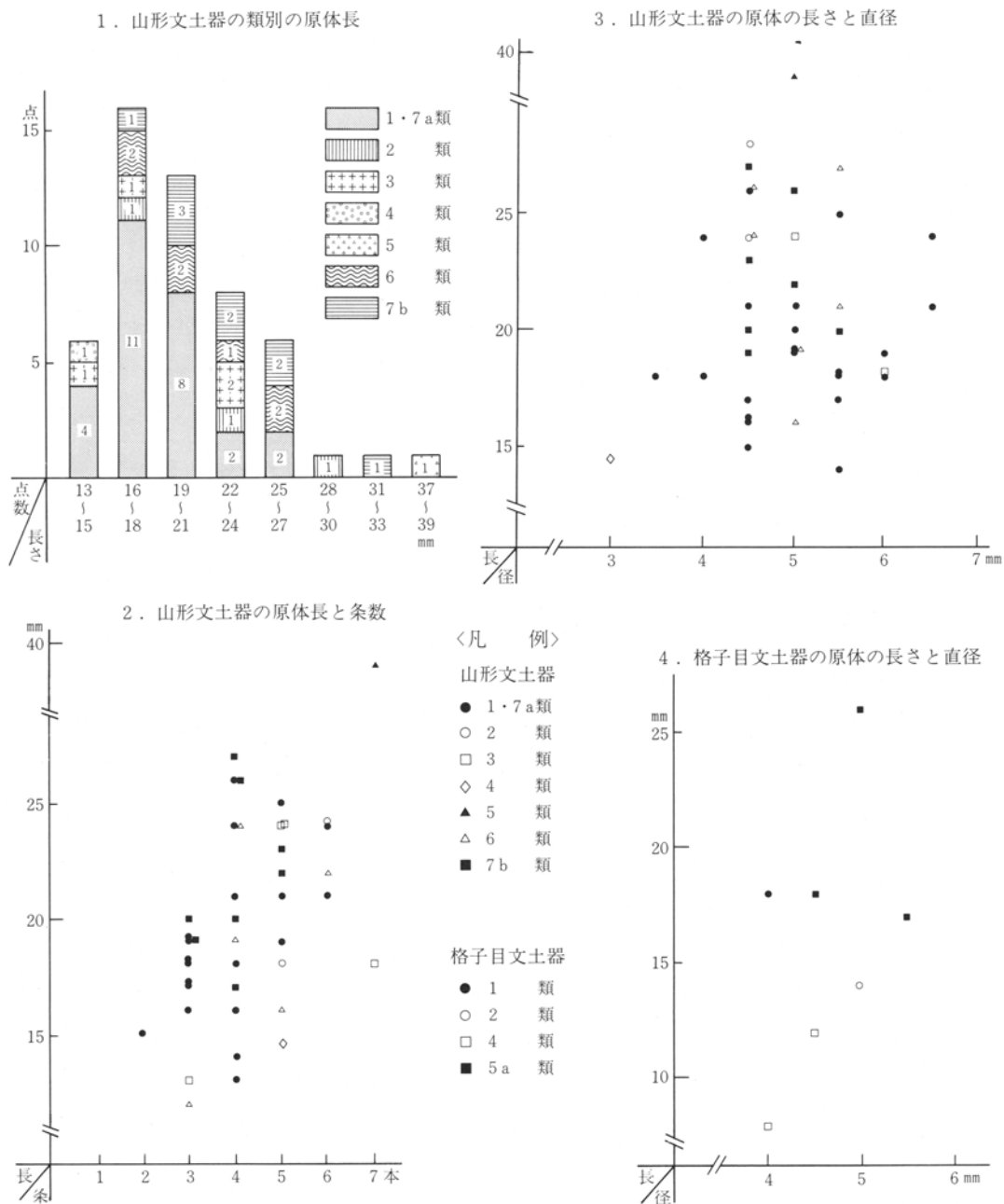


図11 各類別の施文原体の長・径比

その他の押型文土器 各々1点ずつの存在であり、バラエティーはみられない。4類は格子目文の中に点状の彫刻を施したもので、基本的には格子目文のバラエティとしてとらえられるものであろう。

縄文施文の土器 節の細かい単節のRLとLRの2種類がみられ、その個体別の比率は10：7とRLが多い。各類別単位での嗜好性はみられないようであるが、資料数が少なく断定できない。

(5) 原体の長さ・直径と単位文様の条数 (図11)

山形文土器 原体の長さを判別できるものは48点、直径については369点であり、1個体の中でその両方を判別できるものは47点(個体)にすぎない。それを各類別にまとめたのが図11-1である。まず原体長をみると、直交帯状施文の1類は最長26mm、最短13mm、平均19mmで、約70%のものが16~21mmの間におさまる。1類以外の各類については資料的に少なく、単純には比較できないが、山形文土器の中で最長のものは横位密接施文の5類の39mmであり、1類とは大きな差がある。総体でみれば13~27mmのものが94%を占め、平均では約20mmである。次に原体の直径をみると、1類では最高6.5mm、最低3.0mm、平均4.7mmで、4.0~5.5mmのものが85%を占める。総体では最高8.0mm、最低3.0mmであるが、4.0~5.5mm長のものが全体に占める比率や平均値などは1類と全く同じであり、他類も1類に類似した傾向をもつと思われる。これらの原体の長さや直径との相関性をグラフであらわすと、図11-3のようになる。資料的な多寡による制約があり各類別の傾向は判らないが、両者がほぼ比例関係にあることは間違いないだろう。

一方、山形文の条数は、1類では最高6条、最低2条で、3~4条が70%を占める。また1点のみであるが、原体の長い5類は7条と条数も多い。総体では1類の2条を最低として7条が最高であり、3~5条が81%を占める。原体の長さや山形の条数との関係をみると、図11-2のようにやはり両者が比例関係にあることが判る。

格子目文土器 原体の長さを判別できるのは8点、直径については13点、その両者を判別できるのは7点のみである。各類別単位での傾向は不明であるが、1類は原体長18mm、直径4.0mmで山形文土器に類似し、4類の菱目文土器の原体長は8~12mm、直径4.0mmとやや短小である。総体でみると、長さは最高26mm、最低8mm、平均16mmである。直径は最高5.5mm、最低3.5mm、平均4.4mmであり、長さ・直径ともに山形文土器に類似した数値をもつ。

楕円文土器 原体の直径を判別できるものは11点、長さおよびその両方について判別できるものは3点のみで、格子目文土器と同様に各類別の傾向は不明である。長さは最高39mm、最低21mmで、中途までの長さが判別できるものを加えた平均値は27mmである。直径は最高8.0mm、最低4.5mm、平均5.9mmである。長さ・直径ともに山形文土器を上回っている。

その他の押型文土器 原体長や直径の判別できるものは、2種類の原体が横位密接施文される1類のみである。長さ27mm、直径5.5~7.5mmで、III群の楕円文土器に類似して長大である。

縄文施文の土器 長さを明確に判別できるものはないが、施文の幅から推定すると20~25mm前後であろうか。

(6) 原体の端部処理 (図12)

原体端部の処理のあり方を観察すると、軸棒に刻む単位数により若干の差があるが、図12のようなA・Bの2種類がみられる。山形文土器では確認できる482点のうち、480点がA種で、B種は残りの2点のみである。

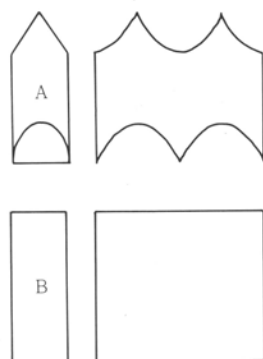


図12 原体の端部処理 (可児：1969)

る。楕円文土器も観察可能な13点の総てがA種で、山形文土器と同様の傾向を示す。これに対して格子目文土器では、18点のうちの4点がB種であり、各類との相関性は不明であるが、他の押型文土器に比べて格子目文土器とB種とのより密接な関係が窺える。

5 各押型文土器の類型

帯状施文や口唇部の施文の有無、および施文方向の差異を中心とした前項の分類と、前述した各属性分析の結果を加味すると26の類型が抽出でき、それを模式図化すると図13のようになる。

山形文土器 全体で17の類型が存在する。1類の直交帯状施文はA₁～A₅の5つの類型がみられるが、口縁部の横帯が1帯のA₁～A₃類型が主体を占め、横帯が2帯で構成されたり縦帯が横帯を突き抜けるA₄・A₅類型は、極めて少数に止どまっている。口縁部の横帯は口唇部に接するものと、5～15mmの無文部を置いて施文されるものとの両方がみられる。胴部の縦帯間の無文部の間隔は、1・2のように19～21mm幅のものもみられるが、わずか8mmの幅しかない3のような例もある。全体的には3～15mmが多く、平均で10mmである。口唇部への施文は、上面と内角部のどちらか一方のものが多く、両部位に施文するものもある。いずれにしても施文することが基本原則となっている。2類の直交密接施文にはB₁～B₄の4つの類型があり、口縁部の横帯は1類と同様1帯と2帯の両者がみられるが、やはり1帯のB₁～B₃類型が多い。2帯型の横帯間の無文部の幅は11mmほどである。口唇部に施文される場合は、上面か内角部のいずれか1カ所であり、両部位に併施文される例はない。また口唇部上面に施文されない例もある点でA類型とは異なっているが、口唇部上面や内角部へ施文するものが最も多い点では、A類型と共通している。内角部への施文はA・B類型の特徴でもあるが、口唇部上面と内角部の両部位に施文する例があることからみて、これは口唇部上面への施文が位置的にズレたものではなく、意識的に行われているものと判断される。4類の縦位密接施文にはC₁～C₄類型の4つがあるが、口唇部の施文ではA・B類型に見られた内角部への施文が認められない代わりに、A・B類型には無い内面へ原体の幅1帯を横位に施文するC₂・C₃類型が存在する。口唇部上面と口縁部内面に併施文するケースが多く、上面のみのものがこれに次いで多い。横位密接施文の5類は、D₁類型として設定される。資料数が少なく不明確ではあるが、口唇部に施文される例は認められない。

口縁部に横位施文されるものの、全体的な文様構成の判然としない6類の口唇部施文のあり方には、A～C類型にみられた6つのケースの総てが認められる。最も多いのは内角部を含めた内面に施文するもので、これに次ぐ上面施文のものと合わせると総点数の63%を占める。さらに両部位に施文をするものを含めれば、82%のものが口唇部や口縁部に何等かの施文をもつということになる。これらの6類はA・B・D類型のいずれかに該当すると思われる口縁部破片であるが、器形・器厚・胎土・原体長などの諸属性がA・B類型に類似することや、各類の総量的な出土比率において7類を含めた直交施文の土器が全体の83%を占めていることなどからみれば、6類のほとんどがA・B類型に該当するものであろう。とすれば、A・B類型に全く認定できなかった

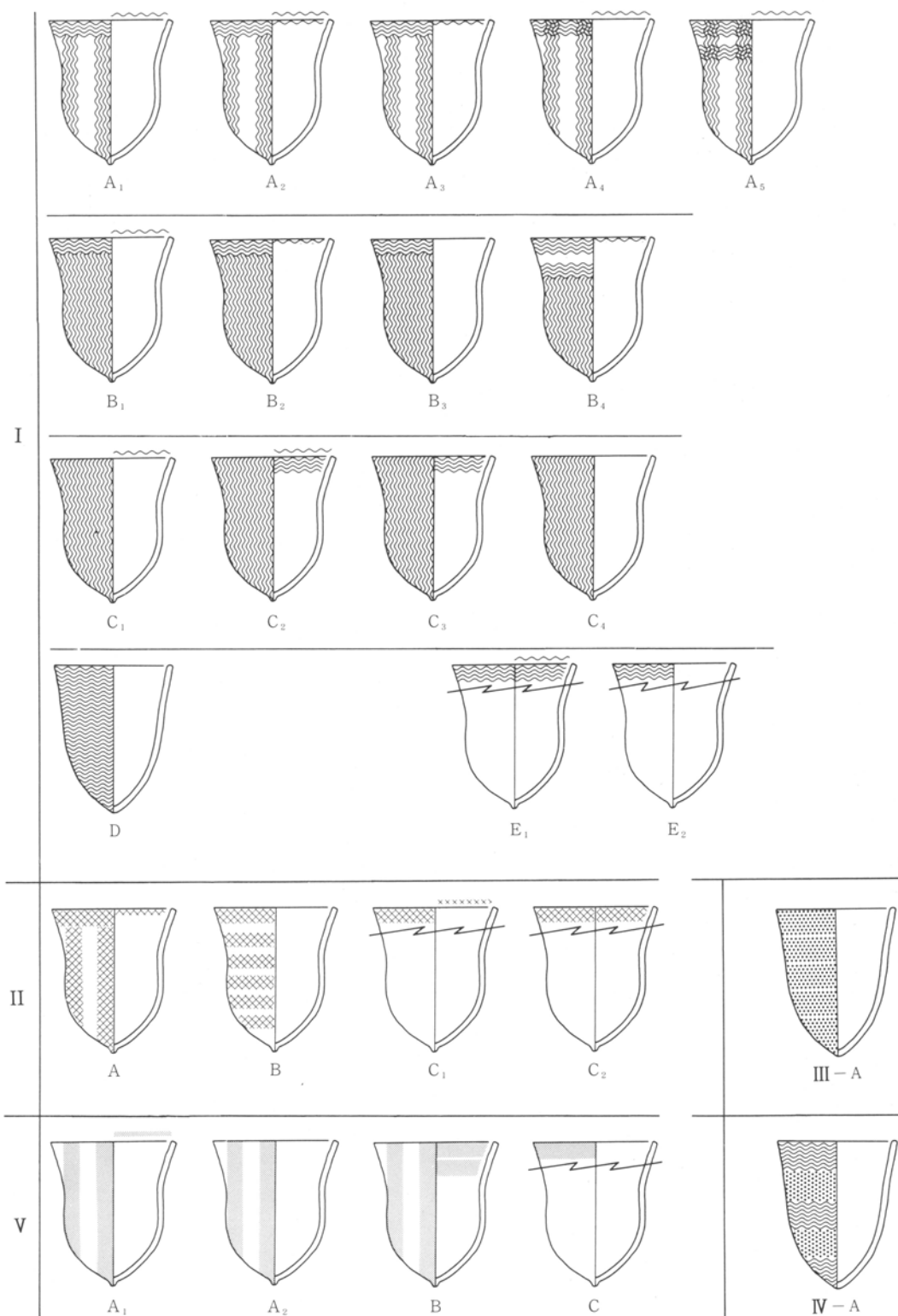


図13 各押型文土器の類型

内面に施文する類型（E₁類型とする）も、両類型において1類型を構成するとみて良く、口唇部や内面の文様構成の面で縦位施文のC類型とも共通要素をもつことになる。また、B類型には存在するもののA類型には口唇部が無施文の類型（E₂類型）は認められなかったが、6類に11例存在していることを考慮すると、これらの総てがB類型に該当するとは考えにくく、A類型に比定されるものも含まれている可能性が充分にある。ただ、このE₂類型の総体的な比率は低いものであり、これを加えたとしてもA・B類型に占める口唇部や内面の加飾傾向に変化はない。こうした結果を逆に5類に対照させるならば、断定はできないが、5類はD類型のみで口唇部に加飾するタイプは存在しない可能性が強い。

全体の文様構成が不明で縦位帯状施文のみ確認できる胴部破片の7a類は、後述する縄文施文土器のV-A₁～A₃類型と同様の縦位帯状の文様構成をなす胴部破片とみることもできるが、6類の口縁部破片にそうした文様構成がまったく認められないことから、それらの総てがA₁～A₅類型のいずれかに該当するとみて問題なからう。この他に同じく文様構成の不明な横位帯状施文の9類は、格子目文土器のII-B₁類型のような口縁部より横位に帯状施文する類型を想定することが可能であるが、内容不明の点が多いため指摘するに止めておく。

D類型を除いた各類型については、文様構成の差異はあるものの器形をはじめとした諸属性の点では、不明確ながらも大きな違いを認めることはできない。しかし、D類型については器形をはじめ器厚・胎土・原体長などの諸属性の点で相当の差異がある。

格子目文土器 全体では5類型が抽出される。1類の直交帯状施文はA類型が確認されたのみであるが、口縁部の横帯は1帯で、胴部には2帯を1単位の縦帯として32mm以上の無文部を挟んで施文している。口唇の内角部にも施文しており、文様構成や諸属性の点で山形文土器のI-A₁～A₃類型と酷似している。2類の横帯状施文もB類型のみで、4～10mmの無文部を挟んで施文され、口唇部には施文されない。全体的な文様構成が不明ではあるが、口縁部の横位施文が確認できる3類については、口唇部上面に施文するC₁類型と口縁部内面に施文するC₂類型を設定しておきたい。口唇部の施文は上面と内面とに認められるが、内角部に施文する例はない。3類と同様に文様構成の不明な4・5類には、横位帯状や横位密接および縦位密接の3類型の存在が想定されるが、内容不明な点が多いために確固とした類型としては設定できない。ただ、4類の菱目文土器は明瞭に横位帯状構成をしており、B類型に比定される可能性が高い。全体的にみると、口縁部破片の7例中、3例に口唇部あるいは内面の施文があり、有施文のA・C類型の胎土は山形文土器の1類に類似する。

精円文土器 明確なものは、全体で1類型に止どまる。横位密接施文の1類はA類型のみで、口唇部には施文されない。胎土に繊維を含む点を除けば、文様構成や器形およびその他の諸属性の面からも、山形文土器のI-D類型に酷似している。胴部破片の3類は、A類型のほかに横位帯状施文、縦位密接施文、縦横重複密接施文、不規則密接施文の4類型が想定できるが、何分にも小破片で全体の文様構成も不明であることから、類型の設定は困難である。

その他の押型文土器 2種類の原体を交互に併用施文する1類は、横位密接の文様構成や含織綫および原体長が30mmを前後するなど諸属性の面で、楕円文土器のⅢ-A類型と類似しており、口縁部より横位に密接施文するⅣ-A類型として設定できよう。縦位や横の位施文が確認できるだけの2～7類の胴部小破片については、類型を設定することが困難である。

縄文施文の土器 各類とも小破片のために文様構成の判然としないものが多いが、検出された総ての胴部破片が縦位施文であることから、Ⅰ-D類型やⅡ-B・C類型およびⅢ-A類型などのように、横位に文様構成するものは存在しないとみて良い。とすれば、1類は口縁部より縦位に带状施文されると判断でき、口唇部上面の施文の有無によりA₁～A₂の2つの類型が設定できる。2類の口縁部破片は、2b類が1類と同様の縦位带状かあるいは密接施文であり、口縁部の内側に横位带状に施文されるB類型となろう。また2d類は口唇部が無施文で、带状か密接施文かは不明であるが、口縁部と胴部とが異方向に直交施文されるC類型となろう。これらの類型は器面の内側に指頭圧痕を残す点で特徴的であり、また胎土に雲母を含むものの存在などとともに、押型文土器の各類型とは異質である。

6 各類型の編年の位置

前項で抽出された26の各類型に対して時間的な序列を与えてみたいが、本遺跡の概要でも述べたように、各類型の出土状況はⅣ～Ⅴb層にかけて混在しており、層位的関係からその序列を定めることはできない。また型式学的見地からその変遷過程を見定めることについても、各類型が資料的に貧弱であることから、当遺跡のみで果たし得るものではない。そこで、押型文土器の主要な分布地域でもある中部地方を中心とした標式的な遺跡例と対比する中で、それら類型の時間的な位置について考えてみたい。

まず、直交带状施文をもつ山形文土器のⅠ-A₁～A₅類型と格子目文土器のⅡ-A類型は、従来から樋沢式とされてきた長野県樋沢遺跡の第1類土器⁽²⁾の中で、胎土に黒鉛を含まないものと類似した文様構成および器形をなしている。直交施文ではあるが、胴部が縦位密接に施文されるⅠ-B₁～B₄類型については、樋沢遺跡第1類土器の中にも同様なものが存在するが、県内の普門寺遺跡出土の山形文土器を標式とする普門寺式⁽³⁾や長野県細久保遺跡の細久保式の1類型をなす2a類土器⁽⁴⁾と共通した要素をもっている。口縁部より縦位密接に施文するⅠ-C₁～C₄類型は、長野県立野遺跡出土の押型文土器を標式とした立野式⁽⁵⁾と類似した内容をもつ。口縁部より横位密接に施文されるⅠ-D類型や楕円文土器のⅢ-A類型は、同じく細久保式とされる細久保遺跡出土の土器と類似している。口縁部より横位に带状施文する格子目文や菱目文土器のⅡ-B類型は、新潟県卯の木遺跡⁽⁶⁾の卯の木式に類例が求められる。2種類の文様が横位密接に並列構成されるⅣ-A類型⁽⁷⁾は、同じく卯の木式や細久保式および長野県塞ノ神遺跡出土の土器に類例が求められる。

つまり、これらの類型を既存の土器型式との関係でみれば、Ⅰ-A₁～A₅類型とⅡ-A類型は樋沢式、Ⅱ-B₁～B₄類型は普門寺式あるいは細久保式、Ⅰ-C₁～C₄類型は立野式、Ⅰ-D類型や

III-A類型およびIV-A類型は細久保式、II-B類型は卯の木式とその型式表象の点でほとんど変わるところが無く、各型式そのものとは言えないまでも、少なくとも平行関係にあると見なすことが可能であろう。現段階における押型文土器の編年は確定していないが、上記の各型式については立野式を除いて、樋沢式→細久保式・卯の木式という変遷観ではほぼ一致を見ている。となれば、これらの土器型式の編年上の位置と照合することにより、各類型の時間的な位置も必然的に定めることができるのであろう。しかし、1つの類型に対して2つの型式が重複するケースや、各属性面で異なる複数の類型について1つの型式があてられるケースがみられ、直接的にその編年にあてはめることには少なからず問題を含んでいる。これは既存の各型式が相互に共通した類型を内包して構成されていることや、さらに細分される可能性をもっているためと考えられる。

前述したように、押型文土器の編年はいまだ確立されていない状況にある。その最大の原因は、発掘調査によって各型式の層位的な新旧関係が十分に把握されていないことにあるが、また同時に最古の押型文土器に何を置き、かつそこからの系統変遷をどう組み立てるのかという型式学的分析が、各研究者によって異なっているからでもある。押型文土器をめぐる研究の現状については、すでに何人かの研究者により論述されている所でもあり、この場においては割愛するが、本遺跡の各類型の位置付けとも関連した上記の各型式内容に対する再検討が、片岡 肇氏⁽⁸⁾や中島宏氏⁽⁹⁾らによってなされており、その概要についてみてみよう。

まずI-A～E類型と共通した内容をもつ樋沢式土器についてである。片岡 肇氏は樋沢式として設定された直交帯状施文を特徴とする樋沢遺跡第1類土器が、単一な様相でなく幾つかの類型によって構成されていることを明らかにし、それを以下の4つのタイプに分類した。HA₁タイプ：口縁部に1～2帯を横位帯状施文し、以下の胴部を縦位に帯状施文するいわゆる異方向帯状施文のもので、胎土中に黒鉛を含む。HA₂タイプ：HA₁タイプと同様の直交する異方向帯状構成のもので、胎土中に黒鉛を含まない。HBタイプ：口縁部から横位帯状施文されるもの。HCタイプ：口縁部に1帯を横位施文し、これに接して以下を縦位密接施文する異方向密接構成をとるもの。そして、HA₁タイプを岐阜県北部から富山県南部を中心に分布する沢式として樋沢式から分離し、残りの3タイプを樋沢式とするが、HBタイプの文様構成が異方向の帯状施文を主モチーフとするHA₂タイプの樋沢式と、1段階下った横位密接施文を主モチーフとする細久保式との中間的要素をもつとして、樋沢式の細分を示唆した。またこの分析に付随して、HCタイプと同じ文様構成をもつ普門寺式について、関東地方に分布する押型文土器は樋沢式土器がその分布範囲を拡大したものとして認定し、独立した型式としての普門寺式を否定した。さらに片岡氏は細久保式についても検討を加えている。細久保遺跡出土の押型文土器は1～6類に分類されているが、その主体をなしているのは次の1～3類である。1a類：口縁部から胴部上半にかけて2～3帯に横位帯状施文し、以下を縦位に密接施文するもの。1b類：口縁部より横位に帯状施文するもので、胴部下半で横位密接施文するものを含む。2a類：頸部に無文部を残して横位に密接施文

し、無文部に施文原体の端部による刺突列を加えるもの。2 b類：口縁、部より横位に密接施文するもの。3類：器面の全面に不規則に施文するもの。片岡氏はこれらの細久保式とされている各類の土器に対し、他遺跡での事例の分析を通じて2 b類や3類などの横位密接施文を主体とする段階＝学間型類型の存在を明らかにし、細久保式と一括されているものが带状施文される1 a・b類などの古い様相を残したものと、2 b類や3類などのより新しい様相をもったものを包含した時間差をもつ複数の類型によって構成されるものであり、型式細分される可能性を指摘した。

一方、中島氏は樋沢遺跡、立野遺跡、栃原岩陰遺跡などの主要遺跡から出土した押型文土器の層的事実について検討を加え、その層位関係による立野式→樋沢式→細久保式という編年序列の根拠が極めて薄弱なものであるとした。そして更に従来の樋沢式と沢式や細久保式などの型式が相互に同一類型の土器を内包していることから、これらを異方向带状施文→密接施文という文様構成を中心とした型式学的分類により、新たに樋沢Ⅰ式→樋沢Ⅱ式→細久保式として再編した。中島氏の設定した各型式の内容は、以下の通りである。樋沢Ⅰ式：片岡氏の分類したHA₁類とHA₂類で、従来沢式とされていたものを含む。樋沢Ⅱ式：HB類とHC類および細久保遺跡の1 a・1 b・2 a類、樋沢遺跡の縦位の磨り消し状の無文部をもつ格子目文土器やHC類と同様の文様構成をもつ縄文土器などであるが、更には狭い無文部を置いて菱目文が横位带状施文される卯の木式の一部や縦位密接施文される立野式的な縦位密接施文のものなども同一段階とする、多岐にわたる類型を含む。また関東地方に分布するHA₂類的なものも含み、片岡氏と同様に普門寺式を樋沢Ⅱ式として解消している。細久保式：片岡氏が学間型類型とした細久保遺跡の2 b類や3類と、2種類の文様が横位密接に並列施文される同遺跡の4類と同様の文様構成をもつ卯の木式の一部である。

片岡氏と中島氏とではその型式内容に差があり、特に立野式の位置付けについては片岡氏が樋沢式の前段階に位置付けるのに対し、中島氏は片岡氏が樋沢式の1類型とみるHB類・HC類や細久保式とした1 a・1 b・2 a類とともに同一段階に置く点で、その違いは際立っている。しかし、両氏とも立野式の扱いや個別型式の内容を除けば、佐藤達雄の示した带状施文→密接施文という変遷観⁽¹⁰⁾をほぼ踏襲する点で共通している。

ここで再度、本遺跡の各類型と両氏による分類や編年観とを対照させてみよう。直交带状施文の山形文土器のうちで口縁部に1～2帯横位施文するI-A₁～A₅類型は、直交带状構成や施文原体の大きさなどの点で樋沢遺跡のHA₂類と類似しているが、前者は無文部の幅が3～21mm(平均9mm)と狭く、口縁部の外反の度合いが小さいことや口唇部上面および内角部を含む口縁部内面の施文例が多い点で異なる。またHA₂類にはみられないが、I-A₁～A₅類型やI-B₁～B₄類型に目立つ口唇部上面や内角部の施文は、HA₂類と同段階の沢遺跡のHA₁類にみられる口縁部内面の施文がより退化したものと考えられ、⁽¹¹⁾前述の密接施文の傾向を併せて考慮すれば、HA₂類よりもむしろHC類に近い内容をもつ。異方向密接構成のI-B₁～B₄類型はHC類に対比され

るものであるが、文様構成を除いた他の属性の面ではⅠ-A₁～A₅類型と差が見られない。中島氏によればこのⅠ-A・B類型は樋沢Ⅱ式として一括し得るものであるが、全体的な型式表象の比較ではこれらの類型間には差が少なく、極めて近い関係にあるのではなからうか。縦位密接施文のⅠ-C₁～C₄類型は立野式と同様に文様構成され、口唇部上面や内面に施文されるものが多く認められるが、立野遺跡の類例には口唇部や内面への施文は少なく、山形文も大柄なものが目立っており、本類型との差もみられる。樋沢遺跡の第3次調査では本類型と同様なもの（山形文Aタイプ1とさせている）⁽¹²⁾がみられ、そこでは沢式を模倣した立野式とされている。しかし、本遺跡では沢式段階のHA₁類やHA₂類などの古い様相をもった帯状構成の土器は見当たらず、不明な点が多いながらも諸属性の面ではⅠ-A・B類型とほとんど変わるところが無いということは、それら類型と近似した段階に位置することを示しているのではなからうか。縦位密接施文の点はⅠ-B₁～B₄類型の胴部施文と共通し、より近い関係にあることが窺える。横位密接のⅠ-D類型や楕円文土器のⅢ-A類型は、細久保遺跡の2a類や学間遺跡例と類似しており、それらと同一段階に比定することができると思われるが、Ⅲ-A類型の約半数以上は胎土に繊維を含む点で異なる。これと同様に胎土に繊維を含むものは、細久保遺跡の4類や卯の木式と同様の2種類の文様が並列構成されるⅣ-A類型に顕著であり、Ⅲ-A類型とは口唇部が無施文であることや粗雑な胎土、外反の少ない口縁部、長大化した施文原体などの点でも共通している。これらはⅠ-D類型とともに中島氏の細久保式に一括されるものであるが、繊維を含むⅢ-A類型やⅣ-A類型などは、より後出的と言えよう。横位帯状施文のⅡ-B類型は樋沢遺跡のHB類とも似ているが、無文部の幅が4～10mmと狭い点はより新しい様相とみることができ、菱目文が10mmほどの無文部を挟んで横位帯状に構成される卯の木式と類似する。また狭小ながらも無文部を残し胎土に繊維を含まない点は、横位密接施文のⅠ-D類型よりも古い様相をもつと言える。一方、押型文土器ではないが縦位帯状施文を主体とする縄文土器のⅤ-A～C類型は、長野県横山遺跡出土の斜縄文土器第1類⁽¹³⁾に類例が求められる。口唇上面や口縁部内面への施文を含めた文様構成をはじめ、器肉が薄く、少数ながら胎土に雲母を含み、内面に指頭圧痕を残すことなど多くの類似点が認められる。本遺跡の押型文土器には、これらの類型と同様の文様構成をとるものはないが、胴部の文様構成のみで比較すれば、直交帯状施文のⅠ-A₁～A₅類型やⅡ-A類型と差はなく、同段階とみて良いだろう⁽¹⁴⁾。

上記の分析に即して各類型の時間的関係をみるならば、Ⅰ-A₁～A₅類型・Ⅱ-A類型・Ⅴ-A～C類型→Ⅰ-B₁～B₄類型・Ⅰ-C₁～C₄類型→Ⅰ-D類型→Ⅲ-A類型・Ⅳ-A類型という順で新しくなり、4段階の変遷が想定される。ただ、各属性面での類似からみても1・2段階の差はそう大きなものとは考えられず、近接した関係にあるだろう。また4段階のⅢ-A類型・Ⅳ-A類型は、胎土に繊維を含まない点を除けば、文様構成を含めた諸属性面でⅠ-D類型と共通点が多く、やはり近接した関係にあると思われる。Ⅱ-B類型については今1つ明確になし得ないが、帯状構成という点では1・2段階と平行する可能性もあるが、それも密接施文に近い帯状施文で

あり、口唇部や口縁部内面の施文がみられないことを考慮すれば、2段階と3段階の中間に位置するものであろうか。これらの各類型あるいは各段階に、片岡氏や中島氏の設定した型式をあてはめるにはより多くの分析を必要とし、限られた頁数の中では果たし得ない。ただ各類型の全体的な変遷過程からみれば、樋沢Ⅱ式や細久保式の細分の問題は残るが、これらの類型は大筋においては中島氏の編年観の中に組み込まれてゆくものと思われる。

7 お わ り に

八木沢清水遺跡から出土した押型文土器の特徴を一口で言うならば、わずかに格子目文土器や楕円文土器を含むものの、密接傾向の強い直交施文の山形文土器を主体として構成されているということであろう。特に口唇部の内角部に施文するあり方は、口縁部内面の施文が簡略化されたものとしてとらえられ、本遺跡の山形文土器の大きな特徴でもある。しかし、これらの特徴によって本遺跡の押型文土器が独立した新たな型式として認定できる訳ではなく、片岡氏や中島氏の主張するように普門寺式土器とともに、樋沢式土器として把握されるべきものであろう。

前項で分析したように、26の類型の中には胎土に繊維を含む横位密接や2種の文様が並列施文される明らかに時間差をもつと思われる類型が存在し、総てが同段階に位置付けられるものではないが、仮にそれらを含めたとしても総体的に極めて単純な様相をもつ点で注目される。このことは樋沢式の1類型とされたHC類が、黒鉛を含む異方向帯状施文のHA₁類と同様の文様構成をもつHA₂類とは切り離されて1段階を構成する可能性を示唆するものであり、これらを樋沢Ⅱ・Ⅰ式として分離した中島氏の編年観の妥当性を傍証するものであろう。いずれにしても分析不十分であり、本遺跡のみの事例で決められることでもない。今後における研究課題とするとともに、各研究者諸氏からの御教示を乞う次第である。

尚、本稿では触れることができなかったが、本遺跡では草創期後半に位置する稲荷台式期の竪穴住居跡の埋没土中から、Ⅰ—A₁～A₅類型のいずれかに該当する山形文土器が出土している。厳密な意味で一括遺物といえる出土状況ではないが、東京都二宮森越遺跡や同尾崎遺跡および千葉県東寺山石神遺跡で検出された押型文土器が、型式学的に稲荷原式や花輪台1式と同段階に位置付けられることを考慮すれば、本遺跡でも稲荷台式と直交帯状施文の山形押型文土器が伴出した可能性を否定できない。こうした事実は、押型文土器をもって草創期と早期とを区分する山内清男の時期区分に修正を求めるものである。この問題については、上記の課題とともに機会を改めて再考したいと思う。

本稿をまとめるにあたり、以下の諸氏から御教示・御協力を賜った。文末ながら記して深々なる感謝の意を表する次第である。尚、本稿の執筆に当たり、当事業団の昭和63年度職員自主研究助成金を受けた。

会田 進、関塚英一、中島 宏、能登 健、洞口正史、大工原 豊、前原 豊、馬飼野行雄、山口 明、山崎克巳（50音順。敬称は省略させていただいた。）

註

- (1) 石坂 茂 「八木沢清水遺跡」 小野上村教育委員会 1978
能登 健・石坂 茂 「八木沢清水遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』 1988
- (2) 戸沢充則 「樋沢押型文遺跡」『石器時代』第2号 1955
- (3) 園田芳雄 「普門寺観音山包含地遺跡調査概報」『両毛古代文化』第1号 1949
酒詰伸男 「栃木県普門寺遺跡」『日本考古学年報』1 1951
能登 健・増田 修・白石典之 「普門寺遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』 1988
- (4) 松沢亜生 「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』第4号 1957
- (5) 松島 透 「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』第4号 1957
- (6) 中村孝三郎 「卯の木押型文遺跡」 長岡市立科学博物館 1963
- (7) 笹沢 浩・小林 孚 「長野県上水内郡信濃町塞ノ神遺跡出土の押型文土器」『信濃』第18巻第4号 1962
- (8) 片岡 肇 「樋沢式土器の再検討ー長野・岐阜両県を中心として」『信濃』第32巻第4号 1980
片岡 肇 「押型文土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣 1982
- (9) 中島 宏 「普門寺遺跡の押型文土器について」『利根川』7 1986
中島 宏 「中部地方における押型文土器編年の再検討」『埼玉の考古学』 柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会 1989
- (10) 大野政雄・佐藤達雄 「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』第53巻第2号 1968
- (11) 片岡氏は樋沢遺跡のHA₁類やHA₂類に口唇部および口縁部内面の施文が認められないことを主な理由として、口唇部や口縁部内面の施文の有無によって「その多寡が新旧の決め手にはならない」としている。しかし、岐阜県中道遺跡や長野県栃原岩陰遺跡から出土したHA₁類やHA₂類などの例を含めて総体的な傾向を見れば、やはり有施文→無施文という変遷がたどれるのではないだろうか。
- (12) 小杉 康 「第5章 樋沢遺跡押型文土器群の研究」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 長野県岡谷市教育委員会 1987
- (13) 林 茂樹 「横山遺跡の斜縄文土器と押型文土器」『信濃』第14巻第3号 1962
- (14) これらの類型は口縁部内面にも縄文を施文する点で広義の表裏縄文土器と呼べるものであるが、その系譜を草創期前半の表裏縄文土器に求められるか否かが、現在問題とされているところでもある。本遺跡の押型文土器とは器肉の厚さや胎土などの面で峻別し得る特徴をもつことから、互いに系譜を違えることは明らかであり、内面に指頭圧痕を残す点などは草創期前半の土器群との関係において示唆的である。

参考文献

- 会田 進 「長野県南安曇郡奈川村学間遺跡発掘調査報告」『信濃』第22巻第2号 1970
- 会田 進 「押型文土器編年の再検討ー特に施文法・文様構成を中心としてー」『信濃』第23巻第3号 1971
- 岡本東三 「神宮寺・大川式押型紋土器についてーその回転施紋具を中心にー」『藤井祐介君追悼記念 考古学論叢』 1980
- 岡本東三 「押型紋土器」『季刊考古学』第21号 雄山閣 1987
- 片岡 肇 「神宮寺式土器の再検討」『考古学ジャーナル』No72 1972
- 片岡 肇 「神宮寺式押型文土器の様相」『小林知生教授退職記念考古学論文集』 1978
- 加藤晋平・土井義夫 「秋川市二宮神社境内の遺跡」 秋川市教育委員会 1974
- 可児通宏 「押型文土器の変遷過程」『考古学雑誌』 第55巻第4号 1969
- 神村 透 「立野式土器の編年の位置について」『信濃』第20巻第10・12号、第21巻第3～7号
- 小林重義 「尾崎遺跡」 練馬区遺跡調査会・練馬区教育委員会 1982
- 小松 虔 「栃原岩陰遺跡の押型文土器」『長野県考古学会誌』27 1976
- 鈴木道之助 「押型文土器と捺糸文土器」『考古学ジャーナル』No170 1979
- 戸沢充則 「押型文土器群編年研究素描」『中部高地の考古学ー長野県考古学会15周年記念論集』 1978
- 西沢寿晃 「栃原岩陰遺跡」『長野県史』全一巻(二) 1982
- 山内清男 「縄文土器の古さ」『科学読売』12-13 1962
- 『第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会 1988
- 『縄文早期を考えるー押型文文化の諸問題ー』帝塚山考古学研究所 1988